

いのちを繋ぐ 言葉で繋ぐ

～あの世とこの世を繋ぐ「亡き人への手紙」#2～

里 みちい (さと・みちい)

あらためまして皆さん、こんにちは。

文字や言葉が何のためにあるか。皆さん一緒に、自分の持っている片文字（牛乳瓶のふたに漢字一文）と誰かの片文字を組み合わせて一つの漢字にしてみてください。OHPで見ただけのようにしておきます。この下から三番目の「木」と「日」を組み合わせれば「東」です。

自分の持っている牛乳瓶のふたで、組み合わせれば漢字のできる相手の人を探してください。精力的に動かないとできませんよ。自分の相手を探して隣同士で座って、「漢字ができました」と言いに来てください。

兵庫県西宮のある小学校の校長先生から、アスペルガーの児童に困っていて、授業をして見せてくれないかと言われました。私は、アスペルガーが何なのかも分からないからお断りしたのですが、とにかく来てくれと言われて出向きました。

アスペルガーの男の子は漢字が全然面白くない。勉強も面白くないと思っていたのです。私は、どの子がアスペルガーで校長先生を悩ませているのか全然知らない。出会いの魔法が働いたのかも知れませんが、「たまゆらの命と命が響き合う時」は、人間の作為的なものが本来に一切入らない。無心に出会う。だからこそよかったと思います。

授業の始めに、児童一人一人に「自分の名前の中に『日』や『月』がある人は、黒板に出て書きなさい」と指示をしました。一番前に座っていた東君が出ていないから「あなたはどうして出ていないの」と言ったら、「僕は入っていない」。「あら、あなたの名前は一本の『木』とお『日』様が合体した漢字なの。ほらほら」と言うと「あー」と遅れて黒板まで書きに出たのです。

「僕の名前はお日様と木が合体した漢字だとわかったことから、漢字がものすごく好きになって面白くなった。こんなふうに漢字はできているんだ」。そこから彼は変わっていきます。やっぱり孤独から救われると、何かと繋がると、大人の私たちも生き直していけるんですね。

型にはまり過ぎていては出会いも捨てている。生き生きした躍動する心が動かなくなってしまうのです。

(朗読)「わかれてそして」

苦しみのこの拙い別れをしたのです

みれんのこの淋しい別れをしたのです

痛みののこる辛い別れをしたのです

そうしてある日

突然に予期せぬ訣れがありました

取り戻せない不意の訣れがありました

諦めきれない永遠の訣れがありました

いつかみんなある日ある時わかれの日

わかれてそしてそこから始まる物語

わかれてそして

わかれてそして

私の父が亡くなってから私がどんなに落ち込むだろうと周りの人が心配しました。父が亡くなって三日目の朝、口からこぼれるように詩が生まれ始めます。自分でも本当に不思議な半年間でした。何を見てもニコニコ笑って、その間に生まれた詩がここ（貼り付けられた「父への手紙」の下）にずらりと並んでいます。

紅葉の有名な京都嵐山の常寂光寺さんが場所を提供してくださって、「京都が大好きだったお父さんのために供養展をしてあげなさい」と言われ、作品を書いて平成十一年の十一月一日から十一日まで十一日間、発表しました。

偶然ですが、きょうは父が生きていたら百歳のお誕生日なので、皆さんにお土産を供養のためにお持ちしましたから、持って帰っていただこうと思います。

（「父への手紙」を朗読しながら、できごとや背景について説明が加えられていく。）

（朗読）「父への手紙」

「あの日から雲におたより書いてます」

お父さん、あの世に紅葉はありますか。

紅葉を見ると、いつだったか、反抗期の私にしてくれた話を思い出します。

一九九六年に亡くなりました。亡くなった後で色々気がついて「ごめんさい」という気持ちです。反抗期の私は、父から「反抗していけない」と一回も言われないうまま大きくなりました。

「うちの屋号『ます紅』は染呉服屋の色の名としてつけられたものではなく、

糸へんを工夫するというのでつけられたもの。

だから、縁を大事に 出会いを大切に、そして素直に生きるんだよ」

「ます紅」という屋号は「ますます 紅くれない色が増える」と簡単に思っていました。紅というのは呉この国で生まれた藍染、呉藍くれないが「くれない」になった。すごいことを私に言葉として残してくれたんだと父が亡くなってから思うのです。

漢字ってこんなに面白かったんだ、言葉ってこんなに豊かな世界だったんだということに気がついて

いきます。私の興味がどんどん文字や言葉にいきます。

それをきっかけに、私の漢字や言葉への興味はだんだん深くなり、言葉遊びの楽しさも覚えました。そうして「草に坐る」という詩が生まれました。

(朗読)「草に坐る」

草に坐ると心が安らぐ

草という字は十字架に支えられているから

坐るという字は土に抱かれているから

皆さん、「坐」という漢字は「土」の上に人が二人座っていますね。土の上に一人で座ってるのに、なぜ二つ「人」の漢字が並んでるんだろう。そんなことを考えると自分のなかでいろんなことが生まれていくんですね。

「母とこれ以上一緒にいると喧嘩しそうだ」と思うと、近くの公園にすぐ走っていきました。「あんなふうな言い方をしてしまった。何でもまたやってしまったんだろう。もっとこんなふうに言えばよかった。あの時は言わなくてもよかったんじゃないか。」とたった一人で草の上に坐っていると、そんなことをどんどん感じ始め、考えていきました。

母との葛藤から私の内省が始まったのです。落ち着いて静かに自分と対話をしていると、もう一人の
声が聞こえるということに気がついて、「草に坐る」という詩を書きました。

また、素直に生きる、というのはどういうことなんだろうと考え続ける中で、「力行で生きる―生きる
力」が生まれました。好きな人がとっても多い詩ですね。

(朗読)「力行で生きる」

かたよら^ず

かま^えず

かたよら^ず

きざ^らず

きざ^らず

きめ^つけ^ず

く^らひ^らず

く^らひ^らず

く^らひ^らず

けろけろ いまの
こころを いきる

生きる力を支えてくれるもの―それは「希望」です。阪神大震災で孤児になった子供達の「希望の家」には「希望」の詩を届けました。お父さんやお母さんがいなくても、いのちがある限り希望を持ち続けられますように、との希いをこめて。

私は四十五歳から大学に行きました。私は向学、心に燃えて行ったわけではなくて、たまたま父が入院して、すぐ近くの大学に入れば毎日お父さんのお見舞いに行けると思った。それがきっかけで、私の大きな人生の転機になっていきます。

四十七歳、大学三回生の時に阪神・淡路大震災が起きました。

ここに座っていらっしゃる方の多くは震災を経験してらっしゃいますね。私は大阪ですが、それでも飛び上がって起きて、世の中大変なことになったと思いました。大学はすぐに休講になりました。

西宮の体育館に毎日ボランティアに私は通います。きょうは何々小学校に行ってくださいと言われ、そこに行つてボランティアの指示をもらつて動き回りました。阪神淡路大震災がなければ私の人生はこんなふうにならなかつたと思います。

西宮の体育館でお弁当を配っていると、八十前後のおばあちゃんでしたが、首を振つてものを言わな

いんです。首を振って食べない。「欲しくないんだね。寒いときに冷たい弁当を食べたくないね。」と私が言うと、その人は「自分の家はつぶれたけど、家族も自分も誰もケガ一つしていない。家を建て直さなければいけないんだけど、お金の心配がいらぬ。他の人には言えないけれど、自分は不安でこんなに泣いてくる。そして落ち着かない。それはなぜなのか。」そう私に訊かれました。お金があつたからつて、希望や安心が買えるわけがですね。

この幅五メートルの「父への手紙」にはそのフレーズを使って下に詩が飾ってあります。父が亡くなつてからこんな作品を書くようになりました。

(朗読)「希望」

希望の「希」の字は

布の上にお星様が光っています

希望の「望」の字は

月の下に王さまも座っています

布はどんなものも包みます

ひろくやさしくあたたかく

まるでお母さんのように

月はどんなものも照らします

じつと黙ってそのままに

まるでお父さんのように

希望

それは父母から生まれた

いのちそのものなのでしょうか

「希望」という詩でその方に答えたのです。

阪神・淡路大震災で六百人近い子供たちが孤児になったらしいのです。その子供たちのために「希望の家」を建ててあげたい、だから皆さんも募金をお願いします。阪神淡路大震災の被災者でもあつた藤本義一さんが書いて、『朝日新聞』にとつても大きく載りました。

それを見て私は、「お父さんも片親でいつも悲しい思いをしたと言っていたから、この子どもたちのために働き動けばお父さんが喜ぶに違いない。父の供養も含めて募金集めに動いたのです。

皆さん全員に「希望の一円」という一つの縁を配りました。全国から一円玉を送ってもらったのですが、「一円玉を五十個送るのに運賃のほうが高くつく」とみんなに笑われました。そういうことやっていません。

「あれこれ私展暮らし展」の案内はがきも、全部捨てるもので作り直しました。襖ふすまや表具の見本帳のいらなくなつた紙に印刷して案内はがきにしたのですね。そこにいらした人たちからたくさんのお金が集まつて、藤本義一さんのところに、「希望」の詩と一緒に送った。寄付金を集めて終わると私は思っていました。

いらした人たちが詩を見て、詩集ができないかと言われ始めて、いつの間にか私の詩があちこちに広まっていくようになったのです。私の詩人としての道を開いてくれたのは阪神淡路大震災でした。また、震災ボランティアのひとつが疲れたときに癒やされたというので、「りんご」の詩は絵と詩のハガキになりました。

(朗読)「りんご」

どこから皮なの
どこから身なの

このとき『身』の字は違ふよ」と言われました。「そうか、人間の私たちはつい、りんごを果実として食べるものとして見てしまうので、『実』が正しいと思っちゃうんだな」。

私たちの小さい頃、りんごは木箱に入れて送られてきました。籾殻のなかにりんごが埋まって届きました。我が家には青森から毎年りんごが送られてきたのです。

「あ、りんごが来た、来た」「今年も来た、来た」とみんなで喜ぶ。籾殻からりんごを取り出す。そのりんごを仏様にお供えしたりして、さあ食べようという時に、上手な人がむくと実のほうだけがそっくりりんごとなる。下手な人がむくと皮と一緒にになって、さっきまでの主役のりんごがあつという間にゴミという名前に変わってしまう。

これって何だろう。このりんごちゃん、かわいそうだな。じゃあ、食べられたりんごは幸せかと考えた。食べられたりんごが幸せなのか、すぐゴミになったりんごが幸せなのか。小さな私はわからなくなっていたのです。

(朗読)「りんご」

どこから皮なの

どこから実なの

私が小さい頃から感じていたりんごの身になり、短い言葉で表現しました。哲学者の人たちとか宗教家の人たちが「この詩は哲学ですよ」と言われた。本人の私は子供の気持ちで書いたので、ちよつとびつくりしています。

りんごが大好きだった息子の成人の日に千円を添えて「二〇歳の祝詩」を送ると数日後、「千円の手紙」という詩で返信が届きました。いまでも、その千円札は小さな額に入れてベッドの横にあるそうです。そのあと息子は紙でお守りを作り千円を入れて父親に送ってきました。息子の成人のお祝いに、今から十七年前の話ですが、あの時代でもたった千円札一枚を添えて詩を贈りました。

(朗読) 二十歳の祝詩

親子で出会ったあなたとわたし
ふしぎなふしぎなめぐりあい
よろこびかなしみ共にして
今日まできました二十年
あなたの道は

この橋渡ったところから
大きく続いているのです
橋の上から 見たでしょう
川の流れを ひとの世を
わたしは かけはし
いずれ朽ちゆく木橋です
ここであなたをみています
ここでじっと祈っています
おめでとう 二十歳
おめでとう 二十歳
ありがとう 二十歳

(朗読) 「千円の手紙」 ゲンキ (息子の名前)

初めての手紙 母からの手紙 中には一枚の便箋そして一枚の紅葉
二〇年間育ててくれた母からの ありがとう おめでとうの二つの言葉
仕送りかと思っただその手紙にたった一枚の千円札がひっそりと

今たった一枚の千円札はキリストの横にある

息子から初めての詩が届いて嬉しいサプライズになりました。

私のクリスチャンの友達が、サッカーをしてよくケガをするからと彼にお守りをつけてくれたのです。すぐにお守りの鎖を切ってしまっって、その鎖を掛けていたところに私から届いた千円札を一生使わないと記念に飾っています。今は三人の子のお父さんになっています。

私の父は、父親が早く病気で死んでしまったことをとっても悲しんでいたのです。自分からなかなか積極的の前に出られなくて、引っ込みがちでした。何か素敵なことがあって話すと、「それはよかったね」「よかったね」「よ・か・つ・た・ね」とその父が、私にいつもいつも、言い続けてくれました。でも、ちょっと困ったこととか悲しいことがあると、「それは困ったね」と言っって、本人は私以上に戸惑い困惑するの、で、大きくなるとだんだん父には言わなくなりました。

父が私にかけ続けてくれた「よ・か・つ・た・ね」という言葉の種が、私から息子に、息子からまた私に、「愛の種」という詩になり花を咲かせてくれています。こうして飛んでゆく「愛の種」は蒔くひと蒔かれるひともしあわせを感じます。そして、感謝の詩が生まれました。

(朗読)「愛の種」

「よかったね」

というあなたからのひとことは

わたしのこころに種を蒔く

思い出すたび芽を出して

葉をつけ

花つけ

実を結ぶ

そこから生まれた愛の種

少しずつでもおすそわけ

蒔く人も蒔かれる人も幸せを感じられる「よかったね」と言う言葉。人間の本当の幸せ。お父さん、私はそれをずっと尋ねてきました。

そして「しあわせて何？」とずっと考え続けていると旅先で知りあった魚の行商をしているおばあさんの横顔から「しあわせカルタ」がひらめきました。

岡山の湯原温泉の「輝乃湯」での出会いです。

私はほんとに我ながら人間が好きだなとつくづく思います。電車のなかでも温泉地でも、わりと平気で人に声をかけちゃいます。

「もしよかったら、私、背中を流しましょうか?」。一人でいらしてた八十ぐらいの方に声を掛けたら

とつても喜んで下さつて、背中を流させてくれました。背中を流した縁えにしで一緒に露天風呂に入ることになりました。

私は、右の耳が聞こえないため、左の耳だけで一生懸命皆さんの声を聞いています。なぜだかこのおばちゃんは私の右側に来たがつて、裸の追いかけてこをするわけにはいかない。それがかえつてよかつた。並んで山を見ながら、この人の一人語りを聞きました。

「私はききよう、下関から来ている。毎朝三時に起きて、子供も孫も使わなくなつた乳母車を改造して、小イワシの行商をして歩いてる。毎日、午前中は行商に出かけて、午後はのんびりして早めに寝て、またあくる朝三時に起きる。そういう生活をしてるんだよ。私や幸せもんだ」と、おばあちゃん。

私の右でにつこり笑つてお話してくれてるその人の横顔を見た瞬間、「なんて素敵な顔なんだろう」と思つたのです。小イワシの行商をしているから、お日様を浴びて色は真つ黒け。海風にあたつていますから、シワはものすごく深いのですが、目はキラキラしている。その人に書きました。

(朗読)「しあわせカルタ」

㊦ ㊧ ㊨ ㊩ のカルタ四枚繰つてみた

自然に生まれた四つの言葉が

そつと教えてくれました

「しわ」と「あせ」と「あし」と「せわ」から生まれるの

しあわせ手にするキーワード

きょう皆さんとご一緒する時間は一時間半ですが、立案しお世話してくださる方があって、こういう出会いが用意されます。「しあわせ」の四文字は「しわ」と「汗」だけじゃなくて、「足」と「世話」、四つの文字は四つの言葉を生み出すことに気がつきました。

また、落ち込んでいた、ひとり暮らしの友人に毎日出していたハガキに貼る記念切手がなくなり、通常の切手を貼ろうとして生まれた詩が「五十円切手」。このメジロの切手に本当に出会ったのは、この瞬間でした。そして、なぜかこの葉書が届いた夜、「もう元気になった」という電話がありました。

たまたま私の友達が奈良の二月堂に行つて鹿を見ていたら、「早く鹿になつて死にたい」と思うようになりしました。大事な人を亡くして落ち込んでいたのです。

そのお友達に、「あなたにきょうから毎日ハガキを送るから、必ず郵便受けを見てちょうだいね」と連絡したのです。そして毎日毎日違う記念切手を貼つてはがきや詩はがきを友達のところに出し続けました。

今でも毎日二、三通ははがきを書きますから記念切手をいっぱい置いてあります。もう買いに行かなければと思いつながら忘れてしまつて、彼女にはがきを出すのに今日貼る記念切手がない。しょうがない、お前でも貼ろうかというのが通常の五十円切手でした。

心を込めて見ると、「あらっ、あんたつてメジロだったんだね」と私は初めて気がついて、切手に語りかけた。ついこの間まで私たちは使っていました、今の五十円切手はニホンカモシカです。

(朗読)「五十円切手」

メジロが一羽とまってる

仲間といふから目白押しといつのに

さみしくないか 一人で小さな紙に乗せられて

今日からお前に「ひ・とり」という名をあげましよう

「ひ・とり」は一人で愛のはがきを運んでいる

「人一人」と「鳥一羽」で「ひ・とり」とかけてあります。「あら、メジロさん、『目白押し』という言葉があるように、メジロは絶対に仲間と一緒にいるはずなのに、切手のなかにいるお前はたった一羽。さみしくないの。たったひとり紙の小さいところに乗せられて、あんたは愛のはがきを運ぶんだね」。メジロの切手も物としか見ていなかった私が本当にそのものに出会ったのです。

大阪の中央郵便局に電話で問い合わせました。

「すみません。この切手のメジロは一羽ですよね？」

「そうですが、何かありますか。」

「一羽でないと困るのです。仲間のくちばしやら、しっぽやらがちょっとでも入っていたら、私、困るんです。たった一羽でないと困るんです。」

「こんな問い合わせは初めてです」と郵便局の人がすごく笑われた。

お話すると、すごく喜んでくださって「その『五十円切手』のはがきができたらぜひ僕に送ってください

い。僕も郵便制度について詳しく書いてあなたに送ります」。四月二十日に始まった郵便制度がなぜ造られたか、それを書いて送ってくださいました。詩はがきを郵便局の方に送りました。

もちろんほとんどの場合、私たちは役目として出会います。役目で出会う時には、とりあえず責務を遂行しようとみんなやつきになっているので、心はそんなに動いてない。

ところが「一羽でないと困る」と言ったあたりからは、郵便局の局員から個人に返っていく。私も「個」に戻っていききました。こういう時は人間と人間がバーンと心の響き合った出会いになっています。そういう出会いが今、とつても少なくなっただんだけだと思います。

通常の五十円切手を貼ったはがきが届いた友人から、「元気になったから、もうこの愛のはがきは止めてくださいいよ」と夜に電話がありました。不思議です。

けさ六時前でしたけれども、去年亡くなったインダストリアルデザイナーの榮久庵憲司さんというもののデザインの世界的に有名な方のお話をずっと聞いていました。「ものがダメになった、捨てるようではだめだ」というお話でした。ものに命があると思ったら、そのものと心が通い合うようになる。「そうだ、そうだ。私もやり続けていいんだ」と思えてうれしくなりました。

「たまゆらのいのちのいのちの響きあひ」

それがお父さんの言った「縁、出会いを大切に」、ということなのでしょうか。

これからも糸へんを大切に生きてゆきますね。

さあ、今年もまた、紅葉ひとひら、障子の引き手に入れましょう。

平成十一年十一月十一日

里みちこ

今年もまた春の青紅葉、秋の赤紅葉をひとひら障子の引き手に入れましょうと書いて、平成十一年、「ひと」もの「言葉」「であいで愛」という「出逢いの二乗展」をやりました。そこで発表した「父への手紙」の作品でした。

お友達の悲しみに、大切な人を亡くして落ち込んでいる人に、毎日ながきを出そうというのも、全部「マイナス」からです。「しあわせカルタ」も、本当にシワと汗を重ねた丁寧な暮らしから生まれています。私の父は、呉服屋をしてはいたんですが、観世流の謡曲の先生で、それに一番時間を使っていました。習う人は、型をもって型を守るところで大体終わってしまう。これでは自分の命が輝かない。型を破って今度はその型から離れていかなければもつたない。命を輝かすためにはどうするかよく話してくれました。

一人一人が心の田んぼを持っています。「田」に「心」を足して「思う」。ペンネームの「里」は「田」の「土」です。枯葉が落ちて牛の糞やいろいろなものが混ざって、ミミズがはうからこそ腐葉土になります。綺麗な土だったら全然栄養なんかあらへん。

きょう、漢字遊びをしてお伝えしたいのは、悲しみや苦しみや嫌なことが時間のなかでプラスの方向

に希望を持つて展開していくのに、言葉が添え木になることです。

前回、私がおみになつていた服を着てきた。きょうは父の着物だったものです。牛乳瓶のふたも、アイスクャンデーの棒も教材に使っているのは全部、ものの命に言葉で添え木をしているのです。宇宙のあらゆるものを全部生かしていく。もつたないから使おうというより、病気とか悲しみとか不幸とか、捨てたくなるようなものを自分のなかで立ち上げていこうということです。

八十八歳の母の夢を見て詩を書きました。

(朗読)「母は一人」

米寿を迎えた母の瞳

いつばい見つめ 多くをあきらめ

たくさん許し そうしてたどりついた

母の白い瞳

母にはよく反抗したので、やっとあの世に送る頃に親孝行になりました。

私は、阪神淡路大震災がなければ、今頃何をしていたんでしょう。人間の根源的なこと、「ほんとに生きる」とはどういうことなのか。阪神淡路大震災のボランティアをして被災者の人達との出会いから、交わりから教えてもらったと思います。「優しさとはなんだろう。」「幸せってなんだろう。」「こんなことをどんどん考えていくチャンスになりました。」

人間との別れは、お引越しもそうだし、自分の健康も少しずつなくしていったり、そういうことは誰にとつてもありますね。別れてそしてそこから始まる物語です。六月十九日に放送大学で「わかれてそして」を読んで、他の詩も一緒に放送されます。興味のある方はどうぞ、聴いてください。

それから、JR神戸駅の真ん前にハウジングデザインセンターというところでもリッチな大きなビルがあつて、そこで二〇〇三年からずっと阪神淡路大震災の亡くなった人、尼崎事故、酒鬼薔薇聖斗君の事件の被害者、あらゆる人達のお盆の供養展を毎年やり続けています。場所の提供もあるからですが、日取りがきょうあすのうちに決まります。八月の十三日からになります。と思います。

情報化社会のなかできれいなほう、よいほう、損をしないほう、得するほう、全部プラスの方向に行き始めて「マイナスの影になつたほう」が置いてきぼりをくうと、必ずバランスを崩すですね。大阪市立大学へ聴講に通つていた時に、「意識して善を追いかけると、無意識で悪をなす」。すごい言葉だなと思ひました。

(朗読)「ないしあわせ」

さりげないひとこと

なにげないふれあい

とりとめもない会話

かけがえのないひととき

なんともいえないないしあわせ

私たちはこの宇宙のあらゆるものにまつすぐ向かうことが、今ほんとに私たちはなくなってしまうた。型とか自分にこだわらないで、もっと豊かな、目に見えないものを抱きかかえる社会ができていかない。と、どんどん生きづらい世の中になっていくなと感じて、神戸でも毎年やり続けているのです。新しい作品を発表するつもりです。三日前まで小豆島で個展でしたから、いろんな作品を見ていただけだと思います。

〔朗読〕「命の四季」

思いきり泣いて 春がきて

思いきり笑って 夏がきた

いっぱい泣いたら 秋がきて

いっぱい笑ったら 冬がいった

春に花びら ひとひら出かい

夏のお日さま きらきら浴びても

秋にはわかれの ひらひら落葉

冬の風花 ほろほろ沁みて

泣いてるうちに またも春

季節は めぐる

こころは めぐる

思いきり生きて ひととせすむ

いつほら生きてふたとせすぎて
齡かざねて生きていく

今日もよろしく
はるなつあきふゆ
いのちよろしく
春夏秋冬

前回もお話したように、NHKで詩が使われる日に初めて父が夢枕に立ちました。

(朗読)「ありがとうとじいめんなやつ」

目でいえる
口でいえる
手でいえる
合掌でいえる
体でいえる
こころでいえる
ふたつの言葉
ありがとうとじいめんなやつ
どちらかひとつを選ばなかったら
それはやっほじ……

(受講者) ありがとうございます

最後の言葉ありがとうございました。終わります。

里 みちこ (さと みちこ)

島根県出身。四十五歳で京都・花園大学社会人入学(社会福祉学部)。花園大学三回生のときに起きた、阪神淡路大震災のボランティア体験から「希望」の言葉が生まれ、メディアに取り上げられたことから詩人としての活動が始まる。五十八歳の時には島根県出雲町で小学三年生を一年間(一ヶ月に一週間)体験
朝日新聞連載「感字在菩薩」(二〇〇一年)「字遊自在」(二〇〇三年)。